様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｈ０３３８４

研究課題名（和文）「奥行きの感覚」を求めてー新しい奥行き知覚から導かれる新共通感覚の構築

研究課題名（英文）The Sence of Depth

研究代表者
中橋　克成（NAKAHASHI, Katsushige）

京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・客員研究員

研究者番号：６０３０９０４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は古今東西、あらゆるジャンルの美術作品の中に存在する「奥行き」に着目し、作品評価をする際の基準として通用性と妥当性を兼ね備えたものとするための研究である。研究は「奥行き」に関して重要と思われる作例を国内外の美術館、博物館を訪ね多数実見したのち、奥行きの研究のための課題制作に落とし込んだ。そこから実感できた結果に注目し研究を重ねた。それらを3編の寄稿、11編の論考、7編の課題制作報告に纏め、最終年度の3月に課題名と同題の成果報告書、副題ー美術をめぐる新たな鑑賞と実践ー（全244頁）を刊行した。また研究のために制作された952点の作品は記録され、本学芸術資源研究センターに保存された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ブールデル、長谷川等伯、洞窟画を並べ、それらを比較せよと言われると誰もが当惑するに違いない。これらはあまりにも様式、使われている素材、場所、時代背景が異なり、比較しようにもその基準がないからである。本研究は、これらを比較し得る尺度、つまり奥行きという観点からの統一的な基準で様々な時代や様式の作品を横並びに比較検討し、それらの作品の理解と共感を深める試みである。このことは、東西の美術はもちろんのこと、美術のジャンルにおける再配置、再評価の試みであり、また美術教育における領域横断的なコアカリキュラムの提案でもある。

研究成果の概要（英文）：This research looks at “the sense of depth” that exists in artworks of all times, places and genres, and aims to make this concept an acceptable and appropriate criterion for the evaluation of artworks. After we observed in person many works of art that are important for the study of “the sense of depth” at domestic and international museums and art museums, we incorporated it in the project of artwork creation for this research. We then focused on the outcomes of this project, and further continued with the research. These results were materialized as 3 articles of contribution, 11 academic articles, 7 reports for the project, and in March of the final year, we published the debrief report with the same title as this research, with the subtitle “New Appreciation and Practice in Art” (total 244 pages). Additionally, 952 pieces of artwork that were created for this research are documented and stored at the university’s Archival Research Center.

研究分野：彫刻制作

キーワード：奥行きの感覚　彫刻空間　絵画空間　東西の風景画　日本庭園の空間　縄文土器の空間　認知脳科学　共通感覚

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1）一般に美術作品における奥行きというと、２次元の平面に３次元空間の奥行きを表現する遠近法を思い浮かべる。いわゆる線遠近法、空気遠近法、逆遠近法など３次元性の錯視の創出のテーマは、繰り返し論じられてきた。しかし二つの眼を持ったわれわれは対象の奥行きを図法的な奥行きとして感じているわけではない。この奥行の感覚を遠近法の問題に閉じ込めてしまうことによって、作品の「奥行き」はつまるところ一定の技法の適用というテクニカルな問題に矮小化されてしまいかねない。そこで本研究では「奥行きの錯視」といった図法の問題からはできる限り離れ「奥行きの感覚」の実体を客観性とあらゆる人への適用可能性を備えたものとして抽出することを計画した。この研究の着想は、京都市立芸術大学において領域横断的かつ実験的・実践的な研究授業としての伝統をもつ「テーマ演習」の際に得られたものである。2012年の開始当初は、粘土を用いた彫塑のモデリングの問題を考察するために立ち上げられた授業だったが、徐々に教員同士の話し合いや講義に招いた脳科学、実験心理学の研究者などとの話し合いの結果、立体作品に限らない「奥行きの感覚」にこそ、様々な美術的観点の基盤があるのではないかという問題意識が明確になってきた。こうした考えから、授業参加教員それぞれが具体的な作家や作例を出発点に調査研究を行い、それをテーマ演習の授業時に発表し、さらに考察を深めるための実技課題を考案し、実行するというサイクルで研究を行なってきた。こうした４年間のテーマ演習授業の成果の積み上げを基に、より高い目標を目指して「奥行きの感覚」を、普遍的な観点を持って創り上げることを企画したことが当初の背景である。

２．研究の目的

(1）この研究では「奥行きの感覚」の実体と由来を突き止め、客観的に伝達可能なものとしてその特性をまとめること、さらにそれを踏まえて、美術作品を鑑賞し、判断する際の拠り所として、「奥行きの感覚」を適用可能なものにすることを目指す。平面作品における奥行きの知覚には、素材、色彩やその濃淡、筆致や筆触などから想定される制作時の身体の動き、鑑賞する者の眼の動きやその集中の時間、また画面の経年変化など「奥行きの感覚」の由来となりうるものは数多く考えられる。しかし、これらに対しての現状の理解は、きわめて漠然としたものにとどまっている。また、立体作品について言えば、陶磁器の焼成やブロンズ鋳造などのように素材が変性したり、置き換わった場合にも、奥行きの知覚に差異が生じる。光の揺らめきやその移動による複雑な陰影変化の下で描かれた洞窟壁画は、その空間のあり方と時間性が奥行きの研究として不可欠だと思われるが、論点として取り上げられているとは言えない。そこで本研究では、多くの人が確かに本質的なものとして感じ取りながら、茫漠としたものにとどまっているこれらの要素（多感覚情報）を拾い上げ、分野ごと、領域ごとにその特性を整理、明確化する。その上で、太古から近代に至るまでの道筋の中で、いかに感覚認知のシステムが細分化されてきたのかを調査し、人間が本来的に持っている共通の「奥行きの感覚」を探り出したい。

(2)この試みを通し、研究のフィードバックとして具体的に考えられる事項として以下の４項目が挙げられる。

＊新たな造形基礎理論の構築 ― 美術史など既存学問領域の研究者や制作者、及び鑑賞者にこれまでにない評価基準と観点を提供する。

＊美術における諸ジャンルの再配置への試案 ― 縄文式土器や洞窟画の新しい解釈から東西世界を結ぶ統合的な領域の再配置案を提出する。

＊ 従来のジャンルを超えた価値基準の創出 ― 東西絵画の再定義や東洋における彫刻の再定義を行う。
＊ 美術教育における領域横断的なコアカリキュラムの基盤の構築 ― 小中高等学校の美術教育への提言や大学美術カリキュラムでの領域横断的教育の実践提案をする。
現代では「美術」という同じ言葉で括られる営みのなかに、目的も発想もまったく異なる制作が混在している。こうした状況のなか、本研究において単一の領域に限らない適用範囲の広い基準としての「奥行き」が明確化されることにより、凡てではないにせよ、ある程度統一的な観点から、多様な作品を見定め、理解することが可能にさせる。
３．研究の方法
(1) 新しい共通感覚の基盤のためには、当然のことながら人間の身体的条件や環境との関係、さらには時間・空間の問題に関しても、専門的な知見が要求される。作家、美術史家、科学者、（認知脳科学、物理学、医学）美学、哲学が班を構成することにより、制作の実感から乖離しない、かつ個人の主観的見解にもとどまらない、真に妥当性の高い成果を提出したい。組織構成は実験制作班、分析検討班、理論構築班の３つに分けそれぞれの班が専門の研究を行なうようにし、かつ専門性を持ち出して、他分野の研究者同士が議論する機会を設け、共に考察することによって新たな研究の展開ができるようにした。また先にも述べたように、考察の深化と検証の手段として、見出したテーマに即した実技制作を行うことも、本研究の独創的な点である。美術における「奥行き」の問題は、学問としてはもっぱら美学や美術史の専門家によって扱われてきた。一方で、制作の現場では、それらとは異なる実感に裏打ちされた「奥行き」という用語の使用が続けられてきている。本研究では、そうした乖離を埋め客観性と実感を両方とも担保することが求められている。管見の限り、こうした組み合わせを有する研究は希である。
(2)具体的方法としては １.各領域の固有の奥行き ２. 原初的、根源的奥行き３. 奥行きの横断と応用というテーマで、ステップを踏みながら探求を進めてゆく。こうした過程から生まれる新しい共通感覚は、領域を限ることなく広げていくことが考えられ得るが、最初から議論が拡散してしまうことを防ぎ、また研究の進捗を確実なものとするために、まずは美術領域での一定の知見を獲得することを目指した。
(3)年度別テーマを、実見制作、分析検証、理論構築の３つに分かれた研究班が予備考察、実見調査、実技課題考査案、制作、評価、問題の確認、そして次の予備考察という具合に役割を決めて順次進展させながら研究する。4年目後期より理論構築を本格化させ、最終年度には総括としての「奥行き知覚から導かれる新共通感覚」を理論化し、その成果を総合的なアーカイヴとして編纂する。
４．研究成果
（１）以下、５年間に及んだ研究を年度毎にまとめ、研究の主柱である実見、課題立案と制作、分析検証のシステムとして特に顕著な成果を挙げたものを概説し、そのほかの国内、海外の研修はその下に記入した。また、作品の実見には、できるだけ異なる分野の研究者と共に観察し評価の交換をするように心がけた。
（２）2016 年度前期　平面表現のテーマは「絵巻」を挙げた。奈良国立博物館にて開催された『信貴山縁起絵巻』を、中ハシ、深谷、重松、小島が実見し、３つの制作課題を考案し実施した。中でも絵巻が垂直に変化した場合、空間的、時間的推移が保たれるのかを縦絵巻をつくることによって検証した。研究成果報告書「奥行きの感覚」を求めて―美術をめぐる新たな鑑賞と実践 p132–P134 記載。以下同書を報告書と呼ぶ。
（３）2016 年度後期　立体表現のテーマは「縄文土器」を挙げた。十日町市教育委員会から、縄文土器の破片 6 点を借用し、その模刻を行い、その造形手順や骨格構造を追った。報告書 P190-P192。これに伴って阿部敬学芸員（十日町市博物館）の講演。博士棟大会議室 11 月 10 日。阿部敬自身による寄稿、報告書 P182-P189。
国内研修 9名（中ハシ、小島、藤田、富田、重松、深谷、岩城、藤原、礪波）『舟越桂展』、

新潟市美術館 5/31、報告書P154-P156。海外研修７名（中ハシ、小島、藤田、富田、重松、深谷、藤原）『フランスにある美術館・オルセー、ルーブル美術館、ブールデル美術館、ロダン美術館、アトリエ・ブランクーシ、ピカソ美術館など』9/7-9/15。海外研修5名（中ハシ、小島、重松、深谷、藤原）『ジャコメッティ展』（上海YUZ美術館）7/02。国内研修2名（中ハシ、重松）『縄文土器を訪ねる』十日町市博物館。国内研修 5名（中ハシ、小島、藤田、重松、深谷）『ラスコー展』東京国立科学博物館 及び講義『ラスコーの壁画』東京藝術大学博士リサーチセンター室にて、五十嵐ジャンヌ（東京藝術大学博士リサーチセンター研究員、2018/2/4。以上の主だったものは、2016年本学研究紀要61号記載。その他、両眼奥行き知覚の個人差と脳構造の関係を明らかにしようとしている藤田によって興味深い舟越桂やジャコメッティの作品が論述、報告書p154-p159。

（4）2017年度前期 原初的、根源的奥行きとしてのテーマは『洞窟画を考える』。学生を伴う見学会は、『ラファエル・デラポルタのショーベ洞窟展』京都文化博物館、『京都市動物園のキリン、漠、象』。先史時代の洞窟壁画は描写ではなく記憶によるものであることから、凹凸の面のドローイング、記憶によるドローイングの課題を行う。報告書P80-P83。これに伴って五十嵐ジャンヌの講演『美術の始まりから考える』本学大学会館交流室にて（東京藝術大学博士リサーチセンター研究員）5/11。五十嵐ジャンヌ自身による寄稿、報告書P70-P79。

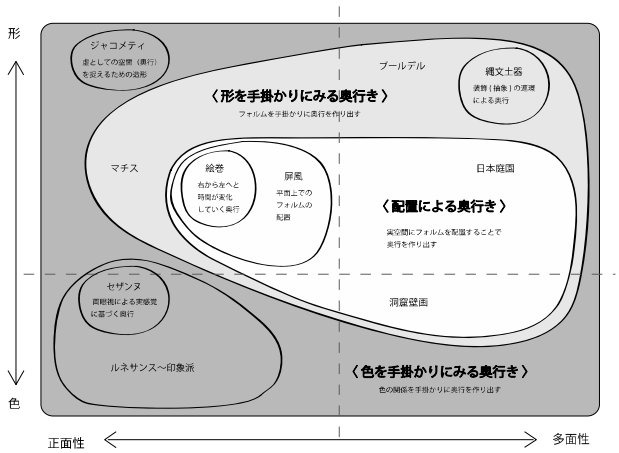
(5)2017年後期 奥行きの横断と応用のテーマ1として「マチスの切り絵」を挙げる。これは初年度見学していたジャコメッティの絵画と彫刻にも同種のテーマが考えられた。課題『マチスの切り絵・模写とその展開１』。海外研修 ８名（中ハシ、小島、藤田、富田、重松、深谷、藤原、竹浪）『ラスコー洞窟群、ロマネスク教会、ニース、ヴァンスの美術館など』8/16-8/26。　国内研修2名（中ハシ、藤田）『ジャコメッティ展』豊田市美術館、12/6。以上は2017年本学研究紀要62号記載。報告書P148-P152。

（6）2018年度前期 奥行きの横断と応用のテーマ2は「マチスの切り絵」を再び挙げる。前年度後期より引き続きマチスの切り絵を扱いながらも模写から離れ、切り紙の色を変え、実際のモデルの投入など同じテーマの応用を模索した。課題『マチスの切り絵・その展開２』。報告書P84-P85。

(7)2018年度後期　奥行きの横断と応用のテーマ3「風景画の東西」を挙げた。東西で考え方が異なるように思える風景画を扱う。東西の風景画展の見学会の後、風景を記憶の問題に捉え直し、山水画に感じる奥行きを異なるメディアを仲介して描いてみた。課題『記憶を交えて風景を描く（構内の池）』。『写真から山水画的空間性を備えた風景画へ』。『范寛の《谿山行旅図》の自由模写』。国内研修6名（中ハシ、小島、重松、深谷、藤原、竹浪）『プーシキン美術館展』国立国際美術館 10/12。国内研修6名（中ハシ、小島、重松、深谷、藤原、竹浪）『阿部房次郎と中国書画』、大阪市立美術館 11/15。報告書P106-P108　この課題制作に並行して２つの関連講義『山水画について』浅野均（京都市立芸術大学日本画教授）講義、11/29。『現代中国における山水の制作方法について』小林玉雨（京都市立芸術大学博士課程学生）講義、12/13。以上は、2018年度本学研究紀要63号及び2019年度本学研究紀要64号記載。

(8)2019年度前期 奥行きの横断と応用のテーマ3「庭を考える」を取り上げた。日本庭園を奥行きの立体作品として捉え、日本庭園の見学のあと、風景の写真を自由にトリミングして平面作品として庭の空間を制作したり、４つの石膏の立方体を削りながら調和的空間を考察した。国内研修７名（中ハシ、小島、重松、深谷、藤原、竹浪、富田）学生４０名含む『天龍寺庭園』4/25。課題『庭を写真でつくる』。課題『枯山水の庭』をつくる。並行して関連講義『庭園の作り方』中根行宏氏（造園家）7/11。中根行宏自身による寄稿、報告書P193-P203。及び同

報告書P204–P205。
(9)2019年度後期 奥行きの横断と応用のテーマ4「ジャコメッティの奥行を考える」を挙げる。マチスの切り絵に続く平面、立体の両方にまたがる奥行きの横断として最後の研究となった。
通常の遠近法を使わずに観察者からの距離を表現する絵画、観察者からの距離を表現する彫刻の制作をする。課題『バナナの距離』。『石膏像の距離』。鑑賞（学生とともに）映画『ジャコメッティ　最後の肖像』スタンリー・トウッチ監督、10/10。国内研修７名（中ハシ、小島、藤田、重松、深谷、藤原、竹浪）『ディエゴと矢内原像』豊田市美術館・国立国際美術館、10/26。そのほか国内研修５名(中ハシ、重松、深谷、竹浪、小島)『ジャコメッティを見る』8/27。豊田市美術館。国内研修5名(中ハシ、重松、深谷、竹浪、小島)『長野県に広がる縄文土器のバリエーションの実見』8/28-29。　2019年度本学研究紀要64号、2020年度本学芸術資源研究センター紀要、報告書P162-P192、報告書P160–P161記載。
(10)2020年　前期・後期　全資料の検証と総括。「全課題作品撮影・奥行き研究の整理、論考など」(1)から(9)の4年間の研究を整理し、また2012年からの初期段階からの資料も併せて総括した。まず平面と立体とをジャンルとしての境界を無くし、奥行きという観点から横並びに評価した。＜形を手掛かりに見る奥行き＞＜配置による奥行き＞＜色を手掛かりにみる奥行き＞の三つのグループにカテゴライズし、それぞれが作品ごとに色と形の表現の強さのレベル、多面性と正面性の程度のレベルによって位置付け、古今東西のあらゆる視覚芸術作品はその定点をこの表の中に見出せるだろう。詳細な内容は、上述した「奥行きの感覚」を求めてー美術をめぐる新たな鑑賞と実践に収められ、5章に分かれ論考11編と上述した寄稿３編を含んでいる。最終の5章では奥行きについて哲学的論点から奥行きを見る人の（主体）の眼と見られる対象のイメージ（客体）の特殊な構造を明かす論述が岩城から述べられ、また医療工学の視点から美術に限らない奥行きの見方が富田から論述された。京都市立芸術大学から2020年度末に発行、全244頁。論考著者（中ハシ、小島、藤田、富田、重松、深谷、岩城、藤原、竹浪）。寄稿著者（中根、五十嵐、阿部）。
また以上の研究で取り組んだ作品点数は 952 点、課題数は 47 課題となった。その授業の詳細な記録や研修の取り組み、会議も含めた資料は、デジタルデータ化され、総合的なアーカイブとして京都市立芸術大学芸術資源研究センターに保存された。以上の総括を表にすると以下のようになる。ここでは視覚芸術のみの奥行きを扱い、触覚の奥行きについてはその範囲を指定できなかった。このことは更なる未知の基準の入り口を指し示すことになった。



５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計46件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　29件）

１．著者名 中ハシ克シゲ	４．巻 2
２．論文標題 「奥行きの感覚」のアーカアイブ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都市立芸術大学芸術資源研究センター紀要・COMPOST	６．最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小島徳朗、	４．巻 1
２．論文標題 奥行きの感覚のアーカイブ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 京都市立芸術大学芸術資源研究センター紀要・COMPOST	６．最初と最後の頁 27-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中ハシ克シゲ	４．巻 63
２．論文標題 ブラインド-モデリングから見えてきたことー触覚の奥行きー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	６．最初と最後の頁 119-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹浪　遠	４．巻 1
２．論文標題 宋代文人士大夫の絵画制作・鑑賞に関する研究―北宋後期を中心に―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 科学研究費　報告書	６．最初と最後の頁 1-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹浪遠	4．巻 63
2．論文標題 研修旅行の概要と考察課題ー中国絵画を中心に	5．発行年 2019年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	6．最初と最後の頁 116-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 重松あゆみ	4．巻 62
2．論文標題 前期テーマ演習「奥行きの感覚」授業報告ー洞窟壁画と動物表現	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	6．最初と最後の頁 118-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小島徳朗	4．巻 62
2．論文標題 後期テーマ演習「奥行きの感覚」授業報告ーマティス「ブルーヌード」の考察	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	6．最初と最後の頁 123-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 62
2．論文標題 研修旅行の概要と考察課題ー洞窟壁画を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	6．最初と最後の頁 115-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 重松あゆみ	4．巻 61
2．論文標題 縄文土器の「奥行きの感覚」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 46-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中ハシ克シゲ	4．巻 61
2．論文標題 「彫刻」の奥行きの感覚	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 重松あゆみ	4．巻 784
2．論文標題 縄文随想「縄文土器のしくみ」穴と渦が生み出す謎の造形世界	5．発行年 2018年
3．雑誌名 陶説2018年7月号・日本陶磁協会	6．最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 424
2．論文標題 東海有仙山―従日本看神仙山水的伝統与変革―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 故宮文物月間	6．最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中ハシ克シゲ	4．巻 2
2．論文標題 「奥行きの感覚」のアーカイブ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 COMPOST	6．最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 64
2．論文標題 研究プロジェクト「奥行きの感覚」2019年度活動報告	5．発行年 2020年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部紀要	6．最初と最後の頁 93～104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 424
2．論文標題 東海有仙山―従日本看神仙山水的伝統与変革―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 故宮文物月間	6．最初と最後の頁 20-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 重松あゆみ	4．巻 784
2．論文標題 縄文随想「縄文土器のしくみ」穴と渦が生み出す謎の造形世界	5．発行年 2018年
3．雑誌名 陶説	6．最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 61
2．論文標題 『全五代詩』にみえる絵画関係資料　2	5．発行年 2017年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 62
2．論文標題 廬山と江南山水画―董源・巨然山水画風の成立をめぐって―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 53-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 1
2．論文標題 中国山水画の展開と廬山―古代から現代まで―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 生きてゐる山水―廬山をのぞむ古今のまなざし.岡山県立美術館	6．最初と最後の頁 2-3,6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 1
2．論文標題 「（伝）李成・王暁《読碑窠石図》》を読み解く」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『国際シンポジウム報告書　阿部コレクションの諸相―文化的意義とその未来』、大阪市立美術館	6．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 1
2．論文標題 近代日本における中国書画蒐集と表装	5．発行年 2020年
3．雑誌名 岩﨑奈緒子等編『日本の表装と修理』	6．最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 1
2．論文標題 宋代文人士大夫の絵画制作・鑑賞に関する研究―欧陽脩・王安石・蘇軾を中心に―２　王安石	5．発行年 2021年
3．雑誌名 一般財団法人橋本循記念会　令和2年度（2020年）調査・研究助成　研究成果報告書	6．最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹浪　遠	4．巻 1
2．論文標題 京都市立芸術大学芸術資料館所蔵　中国書画録	5．発行年 2021年
3．雑誌名 令和二年度　京都市立芸術大学特別研究助成（課題番号2020 -005）　研究成果報告書	6．最初と最後の頁 1-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田一郎	4．巻 17
2．論文標題 A relative frame of reference underlies reversed depth perception in anticorrelated random-dot stereograms.	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of vision	6．最初と最後の頁 17-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田一郎	4．巻 10
2．論文標題 Specialized contributions of mid-tier stages of dorsal and ventral pathways to stereoscopic processing in macaque.	5．発行年 2021年
3．雑誌名 eLife	6．最初と最後の頁 5874
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田一郎	4．巻 371
2．論文標題 Weighted parallel contributions of binocular correlation and match signals to conscious perception of depth.	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Phil Trans R Soc	6．最初と最後の頁 257-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田一郎	4．巻 115
2．論文標題 Microstructural properties of the vertical occipital fasciculus explain the variability in human stereoacuity.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proc Natl Acad Sci USA	6．最初と最後の頁 12289-12294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田一郎	4．巻 10
2．論文標題 Specialized contributions of mid-tier stages of dorsal and ventral pathways to stereoscopic processing in macaque	5．発行年 2021年
3．雑誌名 eLife	6．最初と最後の頁 5874-5874
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田直秀	4．巻 26
2．論文標題 すき・きらい・SUKIる（命令する行為と発見するしぐさ）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ザイン学研究，特集号「QOL+（プラス）」を考える	6．最初と最後の頁 6-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田直秀	4．巻 6
2．論文標題 物語の可視化:（逐次型弁証法による発見支援）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 デザイン学論考	6．最初と最後の頁 53-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 富田直秀	4．巻 23
2．論文標題 詩的空間について --ヒトをモノ化せず関係性として捉えるアート視点	5．発行年 2016年
3．雑誌名 Journal of Integrated Creative Studies	6．最初と最後の頁 11-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 富田直秀	4．巻 351
2．論文標題 科学・技術の奥行き（アートの視点を科学・技術に生かす）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京機短信	6．最初と最後の頁 2-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 2
2．論文標題 Connection between Rough Brushstrokes and Vulgar Subjects in Seventeenth-Century Netherlandish Paintings	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Kyoto Studies in Art History,	6．最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/229460	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 62
2．論文標題 「17世紀初頭のローマにおける宗教画制作の「模倣」と「着想」：カラヴァッジョ、マンフレーディ、ファン・バビューレンの《キリストの捕縛》を中心に」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 73-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 1
2．論文標題 「オランダ紳士たちの優雅なガウン　――ヤポンセ・ロックと呼ばれた衣裳」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 幸福輝編『17世紀オランダ美術と〈アジア〉』中央公論美術出版	6．最初と最後の頁 245-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 1
2．論文標題 「書画同源？　オランダと漢字の出会い」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 幸福輝編『17世紀オランダ美術と〈アジア〉』中央公論美術出版、2018年11月	6．最初と最後の頁 245-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 70
2．論文標題 静物画・風俗画 女性画家活躍推進はオランダ黄金世紀に学べ（特集 女たちの美術 アートに生きる!）--(女性美術家クロニクル ： 西洋編)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 芸術新潮	6．最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 1
2．論文標題 ルドルフ2 世の宮廷における神話画―男女の神々の交合の意味するもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ハプスブルク展 600年にわたる帝国コレクションの歴史』国立西洋美術館、展覧会カタログ	6．最初と最後の頁 78-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 66
2．論文標題 「研究プロジェクト「抽象のしくみ」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 京都市立芸術大学美術学部研究紀要	6．最初と最後の頁 73-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 深谷訓子	4．巻 33
2．論文標題 「灯火を譲る ： ネーデルラントの絵画と版画にみる高齢の親と子の関係」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 美術フォーラム21	6．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 17
2．論文標題 「西田哲学における〈美〉と〈真〉―西田のカント受容―」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『日本の哲学』第17号「特集　美」日本哲学史フォーラム編　昭和堂	6．最初と最後の頁 12-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 39
2．論文標題 「井島勉『書の美学と書教育』〈表象性の美学〉による〈書＝芸術〉論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術フォーラム21　醍醐書房	6．最初と最後の頁 44-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 1
2．論文標題 文化のGlobalization（全球化）とLocality（地域性、地方性）―武藝作《西湖十五 景図》―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 外語教学与研究社	6．最初と最後の頁 124-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 17
2．論文標題 「西田哲学における〈美〉と〈真〉―西田のカント受容―」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『日本の哲学』第17号「特集　美」日本哲学史フォーラム編　昭和堂	6．最初と最後の頁 12-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 39
2．論文標題 「井島勉『書の美学と書教育』〈表象性の美学〉による〈書＝芸術〉論	5．発行年 2019年
3．雑誌名 美術フォーラム21　醍醐書房	6．最初と最後の頁 44-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩城見一	4．巻 1
2．論文標題 文化のGlobalization（全球化）とLocality（地域性、地方性）－武藝作《西湖十五 景図》－	5．発行年 2018年
3．雑誌名 外語教学与研究社	6．最初と最後の頁 124-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計41件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 中ハシ克シゲ
2．発表標題 もっと面白くなるかもしれない」
3．学会等名 スナバ画廊、講演
4．発表年 2016年

1．発表者名 中ハシ克シゲ
2．発表標題 もっと面白くなるかもしれない
3．学会等名 スナバ画廊、個展
4．発表年 2016年

１．発表者名 中ハシ克シゲ、他２名
２．発表標題 ミュージアムとの創造的対話
３．学会等名 鳥取県立博物館　グループ展
４．発表年 2017年

１．発表者名 中ハシ克シゲ、他１名
２．発表標題 泥仲間
３．学会等名 芦屋シューレ画廊
４．発表年 2017年

１．発表者名 中ハシ克シゲ、他１名
２．発表標題 干泥と陶器との空間的な調和について
３．学会等名 芦屋シューレ画廊・対談
４．発表年 2017年

１．発表者名 中ハシ克シゲ
２．発表標題 触覚が生み出す作品とは
３．学会等名 兵庫県立美術館、講演
４．発表年 2018年

１．発表者名 中ハシ克シゲ
２．発表標題 触りがいのある犬
３．学会等名 兵庫県立美術館、個展
４．発表年 2018年

１．発表者名 中ハシ克シゲ　他２名
２．発表標題 「京都市立芸術大学退任記念展
３．学会等名 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
４．発表年 2020年

１．発表者名 中ハシ克シゲ
２．発表標題 みる冒険
３．学会等名 愛媛県立美術館
４．発表年 2021年

１．発表者名 富田直秀
２．発表標題 病と雑音の香り
３．学会等名 国際文化フォーラム展覧会、ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 富田直秀
２．発表標題 もくてきはない１ no purpose1
３．学会等名 上野の森美術館大賞展、入選
４．発表年 2018年

１．発表者名 富田直秀
２．発表標題 ないをたのしむ展～ひねくれ編～
３．学会等名 京都府立図書館、展覧会
４．発表年 2020年

１．発表者名 富田直秀
２．発表標題 STEAM THINKING -未来を創るアート 京都からの挑戦　アート×サイエンス GIG展
３．学会等名 KYOTO STEAM－世界文化交流祭
４．発表年 2020年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文回想
３．学会等名 ギャルリ・プス、個展
４．発表年 2016年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文回想
３．学会等名 ギャラリー白３、個展
４．発表年 2016年

１．発表者名 重松あゆみ、他２名
２．発表標題 壺中居
３．学会等名 2016年度日本陶磁協会賞、金賞受賞記念展
４．発表年 2017年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文土器の仕組みを発想とした内外が連続する陶造形
３．学会等名 ギャラリー白３、個展
４．発表年 2017年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 Jomonの面影
３．学会等名 ギャラリー島田、個展
４．発表年 2018年

１．発表者名 重松あゆみ、他
２．発表標題 第31回京都美術文化賞受賞記念展
３．学会等名 京都市文化博物館
４．発表年 2019年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文土器の仕組みを発想とした内外が連続する陶造形
３．学会等名 ギャラリー白３、個展
４．発表年 2019年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文土器の仕組みを発想とした内外が連続する陶造形
３．学会等名 目黒陶芸館別館、個展
４．発表年 2019年

１．発表者名 重松あゆみ
２．発表標題 縄文土器の仕組みを発想とした内外が連続する陶造形
３．学会等名 ギャラリー白３、個展
４．発表年 2020年

１．発表者名 小島徳朗
２．発表標題 view / extract
３．学会等名 大阪高島屋ギャラリーNEXT
４．発表年 2016年

１．発表者名 小島徳朗
２．発表標題 frame / phrase
３．学会等名 純画廊、個展
４．発表年 2018年

１．発表者名 小島徳朗、他一人
２．発表標題 日本画の抽象ー色彩と線のリリシズム
３．学会等名 純画廊
４．発表年 2018年

１．発表者名 小島徳朗
２．発表標題 moun / tain
３．学会等名 ギャラリー恵風、個展
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 中国絵画史にみる保存と修理―古代から現代まで―
３．学会等名 京都文化博物館 国際京都学シンポジウム「歴史の中の保存と修理」発表
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 中国山水画の展開と廬山―作品と実景から―
３．学会等名 岡山県立美術館（「生きてゐる山水」展開催）記念シンポジウム「多視点でたどる廬山への道」発表
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 日本における中国絵画史研究の現状と将来像
３．学会等名 黒川古文化研究所　夏季講座「東洋絵画研究のいまとこれから」講演
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 （伝）李成・王暁《読碑窠石図》を読み解く
３．学会等名 国際シンポジウム　阿部コレクションの諸相―文化的意義とその未来
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 超茶会 文人としての90分
３．学会等名 「中国の文房具と煎茶－清風にふかれて」展、泉屋博古館、講演
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 関于唐代松石図和最近出土的山水壁画
３．学会等名 清華大学・陝西省文物局「与天久長：周秦漢唐文化与芸術特展」研討会
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 中国山水画の精華―北宋から20世紀まで― 特別講演会 山水画における倣古―その意義を考える―
３．学会等名 観峰館特別企画展、観峰館
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 花鳥画史からみた呂紀と沈南蘋の位置づけについて
３．学会等名 美術史学会西支部大会 シンポジウム　往還する東アジアの花鳥画、泉屋博古館、講演
４．発表年 2019年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 南宗憧憬―京都芸大の中国絵画　田能村直入寄贈品を中心に―
３．学会等名 展覧会 京都市立芸術大学芸術資料館、展示構成
４．発表年 2020年

１．発表者名 竹浪　遠
２．発表標題 「南宗憧憬」展　開催記念ワークショップ　古画の水墨表現を体感する
３．学会等名 「南宗憧憬」展　開催記念ワークショップ、 京都市立芸術大学芸術資料館
４．発表年 2020年

１．発表者名 深谷訓子
２．発表標題 “An Examination of the Connection between Rough Brushstrokes and Vulgar Subjects in Seventeenth-Century Netherlandish Paintings”
３．学会等名 国際シンポジウム:Appreciating the Traces of an Artist’s Hand（於京都大学）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 深谷訓子
２．発表標題 書画同源？　オランダと漢字の出会い
３．学会等名 国際シンポジウム 17世紀オランダ美術と＜アジア＞（於国立西洋美術館）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 深谷訓子
２．発表標題 “Representations of Dutch Vessels in Dutch and Japanese Paintings of the 17th and 18th Centuries”
３．学会等名 Netherlandish Art and the World: A conference on global art history, （Utrecht University）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 深谷訓子
２．発表標題 “Netherlandish Art and Artists in Spain, 1400-1600”
３．学会等名 Renaissance Society of America, Annual Meeting, Toronto、セッション企画、議長（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 深谷訓子
２．発表標題 "Spanish Patrons of the Utrecht Caravaggisti in Italy"
３．学会等名 Going South: Artistic Exchange Between the Netherlands and Italy in the 17th Century (@RKD)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 富田直秀・他	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 368
３．書名 「未来創成学の展望―物質・生命・こころ・社会・宇宙をつらぬく創発原理を求めて」	

１．著者名 富田直秀・他	４．発行年 2020年
２．出版社 三笠書房	５．総ページ数 272
３．書名 「もっと！京大変人講座」（「できない」から「できる」んだ）	

１．著者名 岩城見一	４．発行年 2019年
２．出版社 新華出版社	５．総ページ数 319
３．書名 『日常世界とタイムトンネル-武藝の描いた大船と京都』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『表現プロセスの探究―美術教育の広さと深さ―』岩城見一：シリーズ《感性論》
Vol.2 （第二巻）google drive アクセス法は岩城　Facebook参照、2020年3月
富田直秀、以下動画発信
1. （最終講義）https://ocw.kyoto-u.ac.jp/course/969/
2. （"SUKI" designing@UNESCO）https://www.youtube.com/watch?v=BAsQYm7C1h4
3. （第8回京大変人講座）http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/252
4. （SUKI-ru song）http://www.youtube.com/watch?v=22V7dLDoSGc
5. （難聴者のための音楽）https://youtu.be/oYA8pOMOtrY?t=3259
6. （病と雑音の香り　１部）https://www.youtube.com/watch?v=m2rdNVVCRSA
7. （おもろトーク）http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/opencourse/149/video04
8. （メンタルヘルスと現代）https://www.youtube.com/watch?v=h5U7cT_vq1s

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	富田　直秀 (Tomita Naohide) (50263140)	京都大学・工学研究科・教授 (14301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤田　一郎 (Fujita Ichiro) (60181351)	大阪大学・生命機能研究科・教授 (14401)	
研究分担者	小島　徳朗 (Kojima Tokurou) (70548263)	京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・准教授 (24301)	
研究分担者	礪波　恵昭 (Tonami Keishou) (70260057)	京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・准教授 (24301)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩城　見一 (Iwaki Ken'ichi)		
連携研究者	重松　あゆみ (Shigematsu Ayumi) (60309044)	京都市立芸術大学・美術学部・教授 (24301)	
連携研究者	竹浪　遠 (Takenami Haruka) (70463445)	京都市立芸術大学・美術学部・准教授 (24301)	
連携研究者	深谷　訓子 (Fukaya Michiko) (30433379)	京都市立芸術大学・美術学部・准教授 (24301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関